

映画「はだかっ子」鑑賞会

2023-6-15 記 小暮 恒二

■開催日時：2023 年 6 月 15 日（木） 13 時 30 分～16 時 00 分

■参加者：26 名 ■会場 中央公民館 8、9 号室

映画「はだかっ子」は、1961 年にニュー東映東京により製作されました。近藤健の原作を成澤昌茂が脚色し、監督を田坂具隆が務め映画化されました。原作の近藤健は、少年少女小説「はだかっ子」で、第 7 回サンケイ児童出版文化賞を受賞しています。また、同氏は、昭和 49 年に所沢市教育委員に就任し、昭和 58 年から約 5 年間教育委員長を務めていることから、この小説の舞台は所沢周辺と考えられます。映画は、ユネスコ村をはじめとして所沢、狭山、入間あたりで撮影が行われたようで、昭和 30 年代前半の所沢周辺をうかがい知ることができます。当時、所沢飛行場は米軍の兵站補給廠となり、現在の入間基地はジョンソン基地として米軍が使用していた時代です。米軍基地を抱えた所沢周辺地域の様子も見えてきます。映像から昭和 30 年代前半の所沢を知ろうという企画です。

参加者に感想を書いていたいただきましたので、感想を掲載し報告といたします。なお、お名前は伏せていただきました。ご了承ください。（順不同）

「はだかっ子」視聴の感想

○良い提案をしていただきありがとうございます戦後の決して豊かとはいえない社会の中で子どもたちは明るく逞しく堂々と生きていたことその子供たちを見守る大人の視線の優しいこと考えることの多い映画でした

○涙なしで見られない大変印象深い映画でした。ラストシーンが全体を表していると思います。子供たちの登校の様子と丘の上の学校の風景は昭和時代の希望、未来、明日への期待を感じさせるものでした。戦争の傷跡が多く家庭に残る戦後間もなく、母子家庭の貧しい生活の中、たった一人の母親を亡くすという悲惨な話ではあるが、その中でも元太少年から逞しく懸命に生きるとのメッセージを受けました。生きること、助け合う社会を賛美した作品で感動しました。子供たちと大人との PTA の討論会は戦後民主主義教育の成果であり大人たちへの強烈な警鐘であった。有馬稲子の高木先生役は素晴らしい演技で教育の可能性を感じさせるものでした。木造校舎の教室、畑の中の道、旧町の街並み、夕闇の西武電車、飛行場、山口線おとぎ電車、ユネスコ村の各国の家々、遊園地の風景はどこか懐かしいものでした。

○62 年前の作品、当時の世相がよくわかります。主人公の少年の父はインドネシアで戦死、母親はちんどん屋、生活は貧しいが皆懸命に生きていた。子供達は常に伸び伸びと走っている。勉強をしているシーンはない。母親も死んでしまうが、少年は泣かない。ユネスコ村のインドネシア館内で一人耐えている。彼はこれから逞しく生きてゆくだらう。現代の子どもたちは、どんな日常を過ごしているのか知りたい。 国民学校 2 期生（1948 年卒）の感想です。

○映像がきれいで、臨場感たっぷりで様子はよくわかりました。 注意して映画の場面を見て、所沢のどこか集中しましたがよくはわかりませんでした。あとで誰かのコメント聞いてなんとなく地点は理解できたように思います。(行政道路沿い＝基地関係と思われる高級車が走っていた。当時を想像させる市街地のすぐそばの茶畑、入間基地の侵入灯？入間川の七夕祭り、全国同じの運動会、なつかしいユネスコ村、西武園遊園地等…) 本当は時間があれば、パソコン操作で一時停止して場所の確認などでできればよかったのですが、いかんせんかなりの長編。何れにしても古きよき所沢の風物を堪能させてくれました。映画とほぼ同時代の少年時代を送ったひとりとして、どこの子供も夏の衣服や遊びなどは同じようなものだったのかと改めて思います。昭和 40 年代に荻窪から青梅までのバス移動の際にみた所沢付近には農家らしき家々が沿道にあり、大都会を一步出れば地方と同じと感じたものです。映画の内容では最終場面では元太の境遇に思わずもらい泣きしたのは自分ひとりだけではなかったようです。

○映像は昭和 30 年代前半の所沢ということですが、今でも面影がある消防署(行政道路沿い?)、アンダーパス(西所沢?)などがありました。私が東京の下町の小学校に入学したのが昭和 35 年で、映像の中の運動会や教室は私の記憶のままの風景でした。懐かしく拝見しました。出演者は実力派の俳優が多く出演されていて、内容も良かったと思います。まだまだ戦争の傷跡が多く残っていて私たちの子供の頃はつらい思いをした方が多くいた時代だったのだと再認識しました。ありがとうございました。

○私自身 主人公 「元太」少年(小学校 6 年生)とほぼ同時代を生きた小学校時代の思い出を重ね合わせながら鑑賞しました。この時代 日本は朝鮮戦争も停戦になり高度経済成長のスタートラインに立った時期ですが、まだ 先の大戦の影響が残っていた時代でした。それは元太の誕生、父の死の背景・小学校での平和教育の状況・生活の格差、差別の実態を映像の中を感じ、また、元太の学校生活での行動にも感動しました。そして、一夜明け本日(16日)の新聞に天皇陛下のインドネシア訪問に向けた記者会見のニュースが掲載されており発言内容に驚きました。戦後生まれの天皇陛下は先の大戦時に日本がインドネシアを占領した歴史を踏まえて『亡くなられた方々のことを忘れず、過去の歴史に対する理解を深め、平和を愛する心を育んでいくことが大切ではないか』と述べられています。今のウクライナ戦争や 23 日の沖縄「慰霊に日」を前に、我々は歴史を正しく理解することから平和を学ぶ大切さを持ち続けることであると思っています。映画「はだかっ子」と「インドネシア」と「天皇の言葉」が重なった昨日今日でした。

○そういえば、最近、映画を見る機会がめっきり少なくなったが、今回、サークル活動の一環で昭和 30 年代前半の所沢を映像から知ろうという上映会が開催されました。これは同名の児童文学作品を映画化したもので、所沢の街並みや、チンドン屋、ユネスコ村、競輪場、茶畑など、そして、小学生の元太少年をとおして当時の世相が映し出されていました。戦争での父の死、貧困、犬の捕獲、競輪場建設を巡るトラブルや小学校での討論会では生徒からの意見や生徒への意見を述べる会で、特に生徒からの意見は真っ直ぐな、純粋な意見で、現在も大いに参考にすべきものであった。昭和 30 年代の日本はどのような時代であったのか翻って見ると、神武景気が始まり、景気拡大の局面にいました。三種の神器(冷蔵庫、洗濯機、テレビ)が出現し始めていましたが、まだまだテレビのない家庭が多く、テレビのある家庭で見たり食堂や街頭テレビに人々が群がって、当時プロレスのヒーロー力道山に見入っていました。映像の中の元太少年をみていると、あの頃同世代の私達も元気にのびのびと前を向いて、どろんこ遊びも勉強も一生懸命さがあったと思う。サークルのメンバーも当時を懐かしんで鑑賞しました。

○この映画の主人公の少年は父親を太平洋戦争で亡くし、母子家庭の貧しい生活のなかで、逆境にめげず、明るく、逞しく生きている姿に感動を覚えました。劇中、女教師と教え子達の絆が強

く感じられました。私事です、私が小学生の時代に、私の姉が、同じ学校の教師であったので、今は亡き、姉の姿と重なる場面が多々あり、懐かしく思い出されました。ちゃばたけのあぜみちや、ユネスコ村のシンボリックな風車のオランダ館、ウォーターシュートが、水面に到達した瞬間、船頭がジャンプするパフォーマンスなど、又、ユネスコ村と西武園を結んで走るおとぎ電車など、当時の思い出が鮮明に蘇りました。運動会のリレー競技のシーンで出てきた、昭和 31 年の頃は、私は高校生の時代でした。余談になりますが、私の高校 3 年間は、所沢から川越への電車通学でした。当時は所沢駅を出ると、入曽、入間川、南大塚、本川越の 4 駅でした。4 両編成の電車は単線のため、入間川駅で上り電車と下り電車が待ち合わせして、運行されていました。又、当時は、現在の、航空公園駅から入曽駅まで間は、殆ど家がなく、雑木林と茅の原野であり、わずかに、畑がある風景が脳裏に残っています。

○昭和 30 年代後半からの所沢周辺の記憶を辿りながら、この映画のシーンがどこで撮影されたのかを考えながら、見ていました。現在のドン・キホーテの向かい側にあった所沢消防署の建物や消防車が映っていました。ここが元太たちの横断するシーンとして何回も出てきます。この交差点から星の宮・南住吉方面への行政道路は、戦後作られたと聞いたことがあります。都内から所沢の市街地を避けて、ジョンソン基地（現入間基地）への行く道路として整備されました。この交差点から入間市方面は、昔からの飯能・秩父への道です。昭和 27 年に結ばれた日米行政協定により舗装整備された道路であり、行政道路と呼ばれています。当時、コンクリート舗装でしたが、舗装された道路はこの道だけで、所沢周辺では主要幹線道路であっても砂利道でした。基地の町として象徴的な道路でしたから、ここで撮影したのでしょう。学校の場面は、飛行場に近く授業中でも飛行機の爆音で学習が中断するような入間川小学校で撮影したのだと思います。運動会の場面でテントが映っており、鼓笛隊の演奏も収録されていました。テントに書かれていた学校名は「豊沢小学校」、鼓笛隊の演奏していた曲は、入間川小学校の校歌です、学校名は、ジョンソン基地の正面ゲートのあった豊岡町（現入間市）の「豊」と、基地を抱えていた所沢の「沢」を合わせたものだと思います。原作者や映画監督の作品に込めた思いや気遣いが感じられました。

○何の予備知識もなく、単に昭和 30 年代の所沢近郊の街並みや風景が見られるということで参加しました。上映がはじまると、父親が戦死し母親と貧しいながらも必死に、そしてたくましく生き抜く少年の姿に引きこまれ、感動を覚えました。また少年を支える周りの人々、おじさん夫婦、担任の先生、同級生・・・との間模様、今の時代とは違う濃厚で人情味あふれる人間関係を当時の家並み・風景とともに引きこまれように鑑賞しました。母親を亡くし、たくましく生きていくという最後のシーンでは思わず拍手したくなりました。でも、有馬稲子は美しく、三國連太郎も昔から良い演技していますね。楽しく見ることができ、元気をもらいました。

○昭和 31 年は私が生まれた翌年で、撮影された 35、6 年頃は多少記憶にあります。場所は違っても、懐かしさがこみ上げてきました。私の父はシベリアでの抑留生活から生還した人で、初詣の生田神社（神戸市）には、足や腕のない傷痍軍人が何人もいました。当時このような物語はどこにでもあったのでしょうか。登場する子どもたちは、大人社会に残る困窮に真っ直ぐに反発し、いかにも戦後っ子です。戦争の悲劇を 2 度と繰り返してはならない、という制作者の願いと、この子達に困窮にとらわれない新しい社会をつくってほしい、という強い期待が込められています。その後日本人は、奇跡の高度成長を果たす一方で、ひどい交通戦争や公害に苦しみました。でも、戦争を繰り返すことだけはしませんでした。そこだけは、制作者の願いが叶ったといえます。でも、これからはどうなのか。いろいろなことを考えさせてくれる 2 時間半でした。

○ ①「24の瞳」に匹敵する内容 24の瞳は戦前中心、これは戦後という違いはあるが、一教師を通して子どもの自我の成長がよく描かれている。 ②事業風景の中で、UNESUCO をベ-

スにして平和を理解させようとしているのは素晴らしい。又最近の異次元の少子化対策の空疎な言葉の羅列にも似た大人の発言に放った生徒の児童憲章云々の一言は輝いている。最近、広島県教育委員会が大人の倫理観を振りかざし「はだしのゲン」を小学生の教材から外したようだが 子供の意識の高さを読み誤っているのではないか。 ③戦後民主教育が懐かしく思い出される。

担当 C グループ（佐野、佐藤、藤澤、小林、柴崎、荒幡、粕谷、小暮）